

令和5年度 特色ある教育実践研究校 報告書 可部南小学校

1 学校の課題

※データ等を基にした学校の課題

令和4年度「特色ある教育実践校 生徒指導」の指定を受け、特別活動を基盤とした学校づくりについての実践研究を始めた。1年が経過したが、仮説を立てたその有効性、目指す子ども像や学校像に近づいているかということを確認することはできていない。しかし、本校の児童の姿は明らかに変化し、学校の教育活動や授業では児童の自主的、実践的な姿が増え、不登校の状況も改善されつつある。令和5年度は児童教職員アンケートを実施することで、実践の有効性を検証する。

2 研究主題

「かんがえて ベストをつくし みんなで なかよく みつけよう」
 ～支持的風土のある集団の中で「自分にもみんなにもよいことをみんなで一緒に考えよう」と主体的に話し合い活動ができる子どもの育成～

3 取組内容

※1の課題解決に向けて、重点的に取り組む項目とその具体

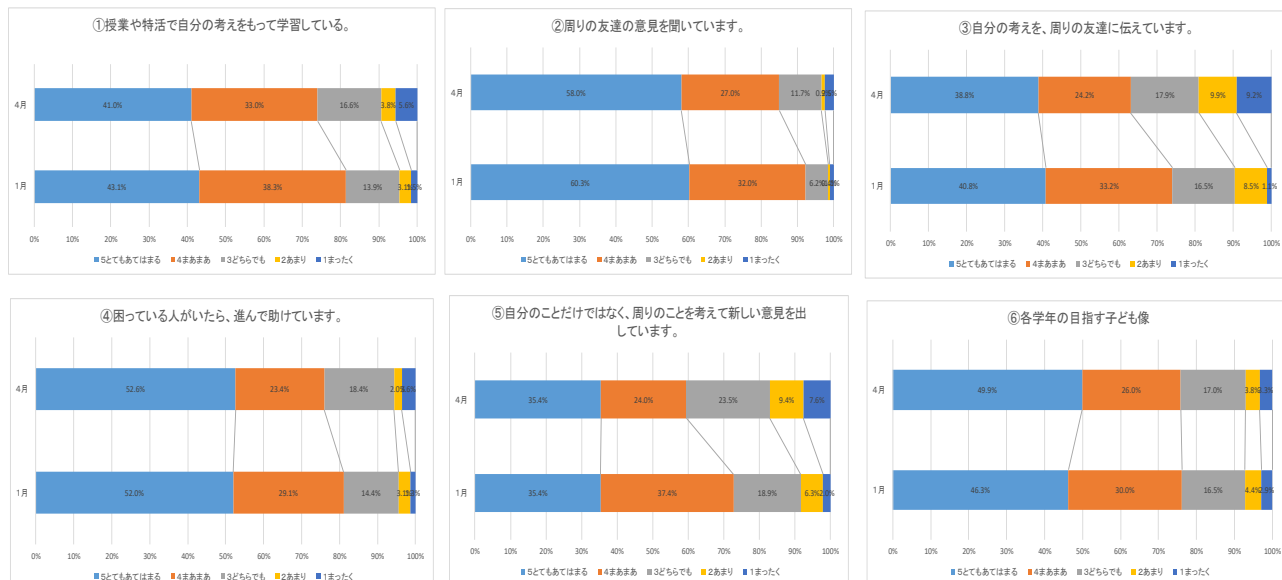
- (1) 子どもたちのあたたかい人間関係をつくるための主体的・実践的な活動を中心とした特別活動の実践
 - ・学級活動（1）における話し合い活動（学級会）の授業研究（全学級公開）
 - ・児童会活動・クラブ活動の充実…児童の自主的・実践的な活動
- (2) どの子ども大切にされる居場所のある学校・学級集団づくり
 - ・学級活動（2）におけるライフスキル教育の実施
 - ・支持的風土の醸成のための学級経営の充実
 - ・「だれもがスペシャル」授業（特別支援教育）の実施

4 検証結果

※成果指標の検証方法および結果

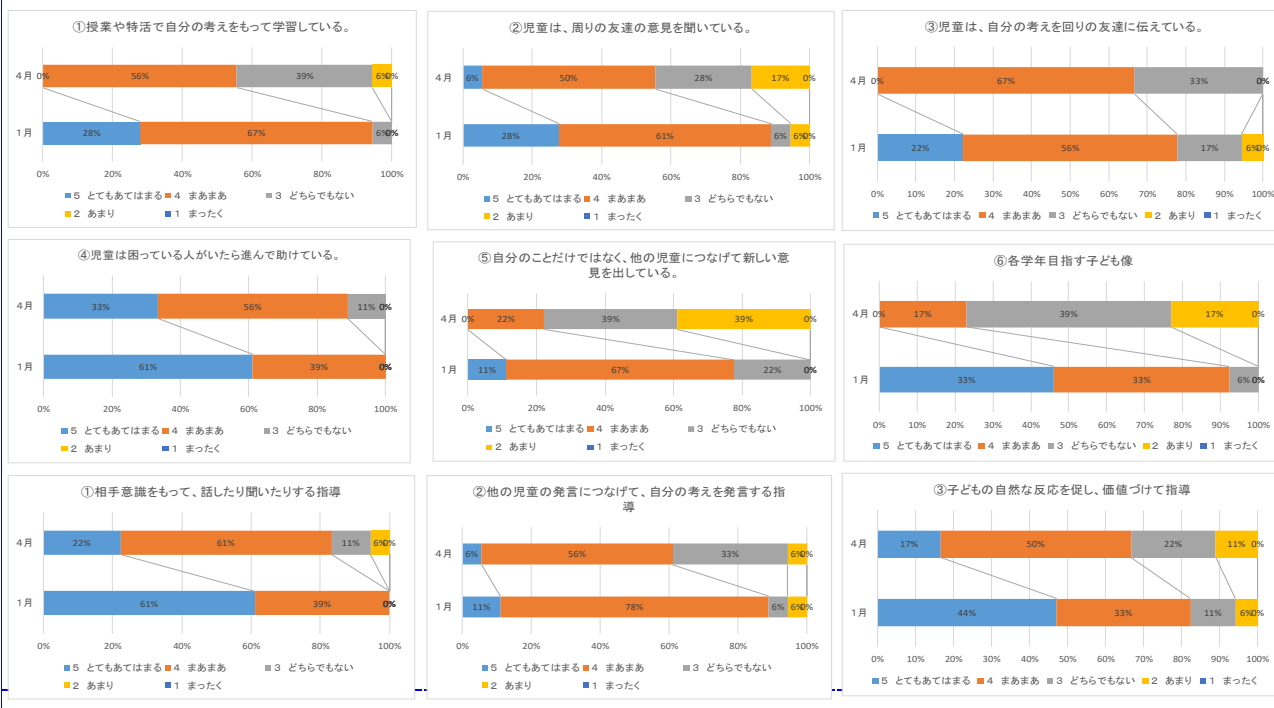
児童アンケート結果

4月と1月 比較



教員アンケート結果

4月と1月 比較



5 研究成果

※○成果・●課題等

- 各学年の目指す子ども像に近づくことができた。
 昨年に続いて取り組んだことで、児童にも特別活動、学級会というものが定着してきた。
- 話し合いのしかたとして、人の意見を一度受け入れてから自分の意見を言うことができるようになったり、話し合う時に、全員が比べ合う視点をもつことで議題や提案理由からずれることなく、学級会をすることができた。
- 委員会活動などの場面で、自分の考えをもって人に伝えようとする姿を6年生だけに限らず5年生の中にも窺うことができた。
- 代表委員会への提案の文章の分量が増えてきていることから、特活の取り組みが浸透していると感じる。
- いじめや不登校等問題行動の認知が少なく、穏やかで楽しい学校生活を送る児童が増えた。
- 支持的風土を醸成するよう努めたことで、だれもが教室に居場所ができ、ふれあいひろば利用者が年間を通して0人であった。
- クラブや委員会などで、異学年の話し合いでの合意形成の仕方や活動の時の年齢差をどのように埋めれば良いかなどをもっと知りたい。
- 委員会では話し合い活動に時間を割いても全体活動が時間内に終わるのだが、クラブの場合は活動する時間が削られてしまうので兼ね合いが難しかったように感じた。
- 6年生の活躍が目覚ましかった一方で、5年生にも活躍の場を設けてやれば来年度の学校のリーダーとして自覚し育つ機会をもっと増やしていく方法を探りたい。
- 全員が前のめりになって話し合うような議題を選定することの難しさ、児童の問題を見つける目をどう育てるか。